1989年度　泉会教職員研修助成
海外研修報告書

高　橋　　正　道

泉会教職員研究助成を受け研修を終了したので報告します。

1.　概略
2.　研修内容
3.　まとめ
4.　補足、その他

1．概略

(1)　研修地

①　Saint-Pierr de Solesmes　(France, Sable)

②　Universita Italiana per Stranieri　(Italia, Perugia)

③　10　Corso Internazionale di Canto Gregoriano　(Italia, Cremana)

④　Sommer Akademie Johann Sbastian Bach
1989, Zehn Jahre　(West　Germany, Stuttgart)

(2)　研修期間

1989年3月22日～1989年9月7日

(3)　費用

収支決済は、別途本学総務部へ提出（1989年10月25日）

2．研修内容

以下四ケ所の研修地を順に報告する。

(1)　①の所在地

Abbaye Saint-Pierre de Solesmes
72300 Sable-Sur-Sarthe France

（邦訳：ベネデイクト修道会サン・ピエール・ド・ソレム修道院）

滞在日　1989年3月25日～3月29日

グレゴリオ聖歌の復興の中心地、とりわけ古文書学的研究の偉業の多くで知られるソレム修道院は、完成された典礼の中でカトリックの教会歴年を行なう所でも有名である。

先代の合唱長ドン・ガジャールは、いわゆる「ソレム技法」という演奏法を完成させたが、第二ヴァチカン公会議以降、聖歌研究の新しい学問的動きが同じ修道院の中から生じてきた。これがカルデイーヌ修道士の「グレゴリオ聖歌セミオロジー」である。[1]　普遍的な「みことばの祭儀」(典礼)を心を尽くし、魂を尽くして行なっている約90人の修道者の「祈りと労働」の場所、それがソレム修道院である。

現在の合唱長は、ジャン・クレール神父。聖歌解釈のスケールの大きさには定評がある。

わたしは今回で四度目の訪問になるが復活祭をこの地で迎えるのは初めてのことであった。聖土曜日の10時30分、私は懐かしいソレムに着いた。

聖務の時間

12：45　Sexte-Repas-Nona
17：00　Vepres
19：20　Diner
21：30　Vigile Pascale

と宿泊棟の黒板に日程が書いてあった。

クレール合唱長は18：00に私の部屋まで来てくださって「早速レッスンしようか？」と、その日のうちに指導が始まった。

《この日の要点》

・今夜の徹夜祭の曲の中に「修道院の祈り」の源泉的な音楽様式がある。即ちLectio-Canto-Oratio(朗読－歌－祈り)がそれである。
・Offertorium：Dexra Domini はカルデイーヌ修道士の命日の Offertorium と同じである。[2]「彼を想い出して祈ろう」と言われた。
　“主の右に誠があり、私は主の右にいる。死でなく生きる・・・・・・”
　(詩編　第117、16．17)

カルデイーヌ修道士はこの曲を聞きながら亡くなられたのであった。

徹夜のミサは、よどみなく挙行された。典礼の総合性、そして修道士達の生きること全てがその中に具現化されていることを感じ取った時、深い精神の喜びが沸き上がり涙が止めどもなく流れた。

翌日、復活の「日中のミサ」は聖堂だけでなく屋外にも列席者があふれていた。院長の祝福は聖堂だけでなく修道院の内部全てにおよびプロセシオンの歌と共に行なわれた。歌声は一旦修道院の奥深くに消えたがやがてかすかな声でよみがえり、序々に近づいて大きくなり再び我々の待つ聖堂に御香の香りと共に入ってきた。Kyrie III番も、Graduale「Haec Dies」のメリスマも、非常に軽い。これが先代のガジヤールの指揮とセミオロジーによるクレールの指揮との大きな相違である。

滞在期間中に「聖霊降臨の固有唱」全曲の指導を受けた。[3]

最終日の指導を受けた後で私が「ソレムは、私の心の故郷です」と言うとクレール師は「人は誰でも二つの故郷を持っている。一つは生きている所。もう一つは、天国だ。」と答えられた。祝福をいただいて修道院をあとにした。

(2)　②の研修地所在地

Universita Italiana per Stranieri

Palazzo Gallenga , Piazza Fortebraccio . 4　06100　Perugia (Italia)

（邦訳）外国人のためのイタリア語大学―ペルージャ（ペルージャ外国人大学）

同大学四月生として入学。　三ヵ月コースを終了。　期間：4月3日～6月30日

《研修目的》

① イタリア語の研修

② 国籍の異なる外国人たち、いわゆる混合クラスでどのようにイタリア語を教えているか。その教授法の実際を体験する。

③ そのような大学の全体の機構や組織を知る。

以上が大きな目的であった。特に、②、③は清泉女学院短期大学の将来的ヴィジョに何らかのヒントが得られないかと考えたからでもある。

この大学は外国人のためにイタリア語とその文化を教える機関で、1921年に創立された。昨年までの累計で156ケ国から184,813人を受け入れた。
年間約2,800人になる。本年度四月期生の私の学生証の登録番号は既に1,551となっていた。

学内のサーヴィスは良く、地方警察や銀行が入っており郵便は到着便だけを扱う。学生相談室では下宿の紹介もする。学生食堂は学部を持ったペルージャ大学の三ヵ所を利用できた。

教授陣は大変に慣れていて積極的。特に会話の時間は身近な話題や題材を取り上げて進められた。例えば、新聞やテレビ番組の読み方、テレビのチャンネル状況、駅、電車、バス、レストラン等の様子や利用方法を実際に町に出て習ったことは有効であった。

学生の入学目的は、多くの場合イタリア国内の教育機関に入学するための語学力の養成。他は就職の為である。従って皆が真剣に取り組んでいる。

語学力がつくに従って会話や討論の内容も各国の特徴が出て、そこにお互いを知り人間として理解しあう、という国際交流が実現されていたことは特筆にあたいする。

《私の受けた授業内容》

・9名の指導者による一週20時間の授業
・内訳は文法、会話、作文、ラボラトリウム
・学内イベント各種：小旅行、講演会、公開討論会、展覧会、音楽会、映画会等。
・試験：単位認定試験（diploma）は6月27日、28日の両日。
・試験科目：デイクテーション、文法、作文、会話の総合評価[4]

(3)　③の研修地所在地

10° Associazione Internazinonale
Studi di Canto Gregoriano
Via Battaglione , 58
I－26100 Cremona　(Italia)
（邦訳）第10回　国際グレゴリオ聖歌研修会

第2課程に参加。　　期間：7月24日～30日

「典礼の国語化」と「分かりやすい典礼」を目標にして、多くの国が「新しい典礼聖歌」を推進しているが、その完成にはまだ多くの時間と労力を必要とするもののようである。

その一方で、古典的な芸術作品（伝統的なもの）の研究も盛んであることを忘れてはならない。①の研修地の中でも述べたように、グレゴリオ聖歌研究も新しい時代に入っている。カルディ-ヌの弟子達の活躍の輪は世界におよび、ついに1975年「国際グレゴリオ聖歌学会」を設立[5]イタリアのクレモナ市に本部を置き1978年以来、毎年夏に「国際グレゴリオ聖歌研修会」を開催している[6]。私は第8回に参加して第1課程を終了したので、今回は第2課程を受講した[7]。

第2課程はボローニヤ大学のアルバローザ教授か担当した。

テーマ：Approfondamento del fenomeno dell'articolazione
（邦訳）「アーティキュレーションの高度な事例研究」

以下のネウマを楽曲中の事例から解説した。

bivirga, trivirga, pressus major, pressus minor, virga strata, oriscus, salicus

古写本中にある上記ネウマの記号論理を発見した後、これを具体的な演奏へと向かわせる。演奏法については毎日、第1課程から第3課程の各クラスが合同でミュンヘンのゲッシェル神父（ベネデイクト会師）の授業を受けた。そして、この実習の全てが研修会最終日のミサへと発展した。

第17主日

Intr：Inclina	Kirie：IV
Grad：Domine Deus	Gloria：III
All：Ostende	Credo：I
Off：si ambulavero	Sanctus：IV
Comm：Illumina	Agnus：IV

以上をクレモナ大聖堂で歌い、祝福の後広場で再会を約束して別れたのである。

(4)　④の研修地所在地

International Sommer Akademie Johann Sebastian Bach 1989, Zehn Yahre

J．S．Bach Platz
D．7000 Stuttgart（W．Germany）

（邦訳）1989年度　国際J．S．バッハ夏期アカデミー（十周年記念）

期間　8月5日～8月26日

35ケ国から400人参加。「十周年記念」となった今年のアカデミーはバッハとベートーベンの最晩年の宗教音楽が取り上げられた。私はヘルムート・リリンクの指導するゲッヒンゲン聖歌隊に加わりバッハのロ短調ミサの全リハーサルに参加した。

このアカデミーは、リリンクを中心として各国から演奏家や音楽学者が一堂に集い講習と演奏会を行なうものである。

登録した参加者は認められた講習会と音楽会には自由に出席できる。期間中の音楽会40、礼拝（典礼）5、講演会14、セミナー10、その他に指揮、声楽、器楽のコースがあった。リリンクの指揮のコースはいつも満席であった。彼は昨年迄にバッハのカンタータ全曲をレコーディングし、バッハ解釈の第一人者として精力的に演奏活動を行なっている。年度中に彼を招いてプラハとモスクワでもバッハ・アカデミーが開催されるということであった。

彼の演奏解釈の基盤とあの充実したエネルギーがどこから来るのか、それは最終日のStifskircheで明らかとなった。

10：00から礼拝が始まった。オルガンの即興で開始。次いでバッハのカンタータ120番「Gott , man lobt dich in der Stille」(神よ、人は静かにあなあたを賛美して)はアルト独唱。私は引き続きバッハのカンタータが歌われて行くものとばかり思っていた。しかしそうではなく、全員でコラールを歌った。伝統的なコラールで、しかも先のアルトと同じ歌詞だ。この瞬間、私は重要なことに気が付いて、リリンクの方を見た。指揮台に彼の姿は見えずその代わりにオルガンの横で皆と同じようにコラールを歌っていた。この日のカンタータは、ルター派の礼拝定式で演奏されていたのだ。入祭、キリエ、書簡、と進んだ。

演奏会でもなく、古い音楽のデモンストレーションでもなく。紛れもなく、現代に生きる人々の「主の日」を賛美する祈りの中でバッハの音楽は、このような形で生きているのだ。それは、ドイツのキリスト教文化の「今日的伝統」ともいいうべきものであろう。　バッハの精神は、リリンクを通して再現されて、祈る者の心に聖なる体験として響く。私は、リリンクの音楽を学びにシュトウツトガルトに来た。そしてそこで教会音楽家としてのリリンクに出会った。バッハもリリンクも実は同じ音楽的基盤を持っていたのである。[8]

3．まとめ

(1)　グレゴリオ聖歌にしろバッハにしろ、確かに過去のものである。しかも両者ともかなり長い時間忘れ去られていた、という点で共通している。それが今日では新たな光が与えられて我々の心をとらえている。決してアルカイックな趣味などというものではない。そうではなくて、それらの音楽の復興は、学問的な研究の成果から来ている。セミオロジーは革新的学問である。何故ならば、19世紀末に全盛を極め“これこそがグレゴリオ聖歌の範”とされていた「ソレム技法」の誤謬を科学的に一つ一つ暴いてきた。その学問体系を見いだしたのは他ならぬソレムのファミリー内部からであった。自ら築いてきた技法を自ら改訂して行くことになった。古い題材、素材の中に新しいものが見いだされたのである。

また、バッハの演奏解釈は、19世紀においてロマン派の様式的解釈が大勢であったが現代では違う。音楽学的研究によってバッハの人間性がリアルになって、彼の生きざまや聖書における言葉の芸術表出を通してバッハ個人の魂の自由を求める姿が、より鮮明に浮き彫りにされてきている。

今回の研修において、この二つの音楽が確かに現代に生きていて、しかも我々に新たな創造の泉となっていることを確認した。

(2)　「ペルージア外国人大学」におけるイタリア語研修で得たことは多い。指導者、学生共に熱心であり、公的な援助があり、従って公的に認められている真摯な大学であった。

わが国において「開かれた大学」とか「日本の国際化」の議論があって久しい。我が国のそ

れは多くの場合、持っている学部のキャパシテイーの一部を外国人に譲ることであったり、持っている技術や学問の一部分を分け与える事であったるする。そこでは外国人学生と受け入れ側との間に主従の関係が如実であり、時には利害関係の方が大きくさえある。真の国際交流とはギブ　アンド　テイクというような利害を量で測ったような軽い言葉で表現できる次元のものではない。利害を越えた共通の対話の場が必要である。

この大学において学生はイタリア語を学ぶ、という共通の場があった。そして指導者は授業を通じて各国の文化や芸術、政治、宗教等について対話をする場を与えてくれた。我々学生の間に主従の関係や利害の構造はなかったので真の交流が出来たように思う。各自のアイデンティティがその場で確立していた。お互いが対等に認め合っていたのである。
互いの心の中に相手がしっかりと住みつき、彼が大切にしているものを私も大切にして行くこと、これが国際交流で重要なのであると体験的に理解出来た。

4．補足、その他

上記研修地への移動の間に、次のような小旅行を実施したことをつけ加えておく。

(1) Rimini へ。　私のカトリック受洗までを導いて下さった Beniamino Faust Celli フランシスコ会師を Maria delle Grazie 修道院まで尋ねた。神父様は病気療養中であるが力の限り公職を果たしておられた。
(2) 本学設立母体のローマ本部を訪問。聖ラファエラ・マリア様を拝謁することが出来た。また、Monte Parioli では，総長様のお招きを受けた。S．荻島にもお目にかかった。

(3) 東ドイツのバッハ縁の地を訪ねた。Eisenach ～ Erfurt ～ Arnstatt ～ Weissenfels ～ Weimar ～ Halle ～ Leipzig へと移動した。
折しも、東ドイツ市民流出のニュースが西ドイツ・テレビから報じられ、各地で「改革」の動きが感じられた。ライプチヒではバッハ縁の聖ニコライ教会が「新フォーラム」の拠点となっていた。滞在期間中、ライプチヒで秋の国際見本市が開かれており、西側との交流が体制の中で行なわれていた。一方、市民は聖ニコライ教会で祈りと共に改革への道を探る集会に参加していた。[9]

注

（1）セミオロジーについての研究は E・カルデイーヌ師によって開かれた。この学問は、聖歌演奏解釈の鍵であるネウマの総合的な研究で、聖書を歌詞とするこの聖歌にこめられた精神をネウマの形態から探るメトード、とも言うことができる。
重要な研究書のうち演奏上の具体的な問題を扱った入門書が「Primo Anno di Canto

Gregoriano」である。これは本学研究紀要で全面的な翻訳を継続掲載中である。

「清泉女学院短期大学　研究紀要」第4号、1986年参照。

同上　第6号、1988年参照

(2) カルデイーヌ師は1988年1月に帰天された。

(3) クレモナにおける研修楽曲と共に公開発表を計画中である。1990年9月の予定。

(4) 履修証明書、掲載略

(5) 1990年から国際学会は、その言語族によって北欧語族（ドイツ語、オランダ語、英語)、南欧語族（イタリア語、フランス語、スペイン語)、東洋語族（日本語、韓国語）の三ブロックに分けられた。

(6) 日本支部設立は1980年。隔年に全国大会を開催している。1991年の全国大会は長野市の予定である。

(7) 受講証明書、掲載略

(8) 信濃毎日新聞（夕刊）1989年11月24日「祈りの中に生きる音楽」所収

(9)　　同上　　1989年11月26日「つつましさの自由思う」所収